



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争（3）： 太宰治「散華」・「東京だより」                                         |
| Author(s)        | 権, 錫永                                                                             |
| Citation         | 北海道大学文学研究科紀要, 106, 61-79                                                          |
| Issue Date       | 2002-02-28                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/34016">https://hdl.handle.net/2115/34016</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 106_PR61-79.pdf                                                                   |



## アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争 (3)

——太宰治「散華」・「東京だより」——

権 クオン

錫 ソク

永 ヨシ

### 一 はじめに

「意味をめぐる闘争」という観点からここで取り上げるのは、「散華」(「新若人」一九四四年三月)と「東京だより」(「文学報国」一九四四年八月十日)である。前回取り上げた「禁酒の心」や「作家の手帖」もそうだったが、これらの作品には太宰治独特のユーモアがあり、決して暗い／堅いムードは感じられない。その意味で、多様なアプローチがあつていいと認めつつ、本論文ではあえて「意味をめぐる闘争」という観点にこだわりたい。軽快な筆致の裏に潜む重みのある問題、一つは戦争期の「死」「散華」「玉碎」、もう一つは「働く少女」をめぐる問題である。言い換えれば、こういった、すでに一般化した社会現象の認識の仕方、表象の仕方、または言論統制を間に置いて結ばれる

読者との関係性の問題である。

考えてみれば、このような社会における現象を小説の題材として取り上げること自体、どんな形であれ、政治的な行為にならざるを得ない。もちろん、執筆に際しての太宰治の関心事がどこまで深刻なものであったかについて断言はできないが、私を取り上げる一連の作品に一貫して見られる傾向からみて、少なくとも、彼の仕事の中で軽視できない位置にあることは確かであると思われる。

## 二 「散華」

私の関心事からすれば、「散華」が長い間まともに論じられずに来たことは不思議に思えるが、論じにくいところがあったであろうことも想像に難くない。いくつかの短い言及をまずみておこう。

『太宰治事典』（東郷克美編、学燈社、一九九四年）の「散華」の項に、木村小夜は次のように書いている。「へ人間の最高の栄冠は、美しい臨終」とされ、三井君の死が三田君の「玉砕」を称えるための布石のように扱われているなど、時代的制約とはいえ、問題多い作品である。「散華」「玉砕」を題材として取り上げるとき、それは自ずと「問題」含みのものとならざるを得ないが、その問題性は、実際にはもつと複雑なものと思われる。他方、肯定的な評価もみられる。

①「散華」という、戦争死の美学をきわめた言葉をつかいながらも、それをへ大いなる文学のために「死ぬことと、

等価にみなそうと」している（松本健一<sup>(1)</sup>）。

②「戦場における玉砕を（美しい臨終）と抽象化したことによって、文学の無効性に没入する姿勢を宣言することができた」。「二人の死が等価のものとして並べられ」、「玉砕死と病死との間に差はない」（鳥居邦朗<sup>(2)</sup>）。

本論文を、数年経った今書きなおす段階で、この作品に関する新しい論文―最初の本格的な「散華」論―を入手した。この論文で北川透は、「散華」と「玉砕」との違いを説明しながら、「三井君の〈散華〉は、三田君の〈玉砕〉を相対化する装置になっている」とし、同時に松本健一の場合と同じく、この作品に隠された太宰治の「メッセージ」は、「戦争のためではなく、自分は《大いなる文学のために》死にたい」というものであった、と述べる<sup>(3)</sup>。では、この作品をめぐるどのような価値判断が可能なのか。

### 「玉砕」

一九四三年五月十二日、山崎保代大佐以下二六三八名のアッツ島守備隊は、海上を包囲され、上陸した一万名のアメリカ軍に圧倒された。大本営は五月二十日、同島の放棄を決定した。山崎部隊長は「英魂ト共ニ突撃セン」と訣別の辞を打電して残存兵を率いて最後の突撃を決行し、負傷して捕虜となった二九名を除く全員が戦死もしくは自決した。守備隊を見殺しにした大本営は、翌三十日、これを「玉砕」として発表した。

それ以来アッツ島の「玉砕」は、例えば「アッツ復仇一億総突撃、前線へ弾丸送れ、挙国戦力増強に挺身<sup>(4)</sup>」という新聞記事の見出しに端的に表れているように、国民精神強化と「増産」へと日本人を駆り立てるのに利用された。ま

た、この「玉碎」は美しい戦死として讃えられ、その後の大規模な「玉碎」の連鎖につながることになる。アッツ島の「玉碎」は多数の文学作品でも取り上げられ、例えば、斉藤茂吉の「神の御軍・アッツ島の忠魂に捧ぐ」<sup>(5)</sup>、前田夕暮ほか五人の「アッツ島の神々」<sup>(6)</sup>など、ほとんどが「玉碎」を讃えている。

このような状況の中で発禁となった「帝都日日新聞」の記事、「玉碎必ずしも勝利の途に非ざるを知るべし云々」(一九四四年二月十二日号、同日に発禁処分)という題からは、「玉碎」という行為やそれへの賛美に対する批判意識がはっきりと見て取れる。この記事がかなり直截な表現になっていたことは間違いない、そのために制裁を被ることになったのだろう。このような逸脱への取り締まりの眼差しは作家にも内面化され、書きたくない言葉との「心中」<sup>(7)</sup>という現象が生まれる。私は「散華」を「逸脱の言説」と捉えているが、その認識に立つて言えば、作中に見られる「づば抜けて美しく玉碎」とか、「護国の神」といった、同時代の「玉碎」賛美をそのままなぞったような言葉は、そのような「心中」の産物と考えられる。これらの「規格化の要素」にこそ、「問題の多い作品」という見解が出てくるゆえんもある。

では、「散華」はどのような意味で逸脱を果たしているのか。それは必然的に、戦争期の死―「散華」「玉碎」をめぐる問題になるだろう。

## 二人の死 ― 語りの空白

「私」に師事しながら小説を書いていたらしい三井は、肺を悪くして死んだとされている。「私」は、「三井君の臨終の美しさは比類がない」と感動しつつ、臨終の様子を次のように語る。

三井君は寝ながら、枕元のお針仕事をしていらつしやる御母堂を相手に、静かに世間話をしてゐた。ふと口を噤んだ。それきりだつたのである。うらうらと晴れて、ざつとこぼれるやうに散つて、小さい花吹雪を現出させる事がある。机上のコツプに投入れて置いた薔薇の大輪が、深夜、くだけるやうに、ばらりと落ち散る事がある。風のせみではない。おのづから、散るのである。天地の溜息と共に散るのである。

このように実際に美しい死として語られる三井の死は、「散華」という言葉にびつたり合っている。ところが、三井の死となると、「づば抜けて美しく玉碎」し、「護国の神となられた」と讀てはいるものの、中心は三井と「私」との出会いやその後の関係、そして三井の詩や便りのことなどに置かれている。死についてはそれ以上語られることなく、具体性に欠けているのである。それに、三井から受ける「私」の感動も、純粹にその「玉碎」によるもののように見えるが、実はそうでないことが明示されている。

はじめから、私の意図は、たつた一つしか無かつた。私は、最後の一通を受け取つた時の感動を書きたかつたのである。

それは、北海派遣××部隊から発せられたお便りであつて、受け取つた時には、私はその××部隊こそ、アツツ島守備の尊い部隊だといふ事などは知る由も無いし、また、たとひアツツ島とは知つてゐても、その後の玉碎を予感できるわけは無いのであるから、私は、その××部隊の名に接しても格別、おどろきはしなかつた。私は、三井君の葉書の文章に感動したのだ。

わざわざこと細かに為されたこの説明を通して、「私」の感動が三田の「玉碎」以前のものであること、すなわち、その時点では、アッツ島守備隊のことすら知らず、また三田の「玉碎」が予感されていたわけでもなかったということが確認できる。「お元気ですか。／遠い空から御伺ひします。／無事、任地に着きました。／大いなる文学のために、／死んで下さい。／自分も死にます、／この戦争のために。」この葉書の文章からの「感動」とは、「死んで下さい、といふその三田君の一言が、私には、なんとも尊く、ありがたく、うれしくて、たまらなかつたのだ。これこそは、日本の男児でなければ言へない言葉だ」というものである。

先にみた三井への感動が「臨終の美しさ」から来るものであったことを考えれば、三田への感動が、その死とかけ離れたものであったということは、きわめて重要な意味を持つだろう。まず言えることは、二人の死は「美しい死」として結びついているわけではないという点である。三井と三田の死を抜きにして「散華」を論ずることはほとんど不可能であるが、では、そこにどのような関係性を見出すことができるだろうか。作品の中で両者の関連づけはまったく言っていないほどなく、語りの上での両者のつながりらしきものも、「昨年、私は、二人の友人と別れた。早春に、三井君が死んだ。それから五月に、三田君が、北方の孤島で玉碎した。三井君も、三田君もまだ二十六、七歳くらゐであつた筈である」という冒頭部分と、「散華」という題、この二箇所以外に見あたらない。これでは、二人の死が一緒に語られる必然性を認めることはできない。作品を一つのまとまつた話とする前提に立つならば、二人の死をめぐる語りの空白を能動的に埋めていくことによってしか、「散華」を読み解くことは困難であると考えられる。

## 一つの装置——人物設定について

三井と三田、この二人を比較してみたくなるのは、おそらく名字が似ているからだけではない。二人は年が同じであり、いずれも文学者——三井は小説家、三田は詩人——の卵で、共に「私」に師事している。類似点は他にもいくつもあり、その一方で、非常に対照的な側面もみられる。そのうちのあるものは、彼らの——それぞれ違った——死に方を決定的にしたとも考えられる。もう一人の人物戸石の場合も例外ではない。

類似点のうち、性格に関わる側面についてまず考えてみよう。一言で言うことは難しいが、〈生真面目な性格〉とも言うべきものが両者に認められるように思われる。現象として言えば、いずれも、思い詰めたところがあり、「私」の忠告を受けて「私」から遠ざかることになる。三井は、小説を書いてきたときに限って、「がらがらつと、玄関の戸をひどく声高くあけて」、「勢ひ込んで」、「私」のところへ来るほど小説に夢中であるが、病気が悪化していることを知った「私」が、まず小説よりも体を大事にすることを忠告して以来、「私」から遠ざかる。これを簡単に性格の問題として片づけることはできないだろうが、それは多分に、非常に生真面目な性格の三田の場合と重なる部分がある。三田は、「人間は真面目でなければいけないが、然し、にやにや笑つてゐるからといつてその人を不真面目ときめてしまふのも間違ひだ」という、「私」の忠告を聞いて離れていき、「山岸さん」のところで詩の勉強をするようになる。また、病院に入院している間に、「私」に「激励の言葉」を求めるところにも、三田の性格ははっきり現れている。こういった三田の人物像に関しては、戸石との比較によつてより鮮明に描くことができるが（後述）、三井との類似点を指摘するにしても、両者の間には大きな格差があったと言ふべきだろう。このような性格上の類似および格差を確認した上で、二点目として両者の死に方の問題に移つてみよう。

二人の死そのものは明らかに対照的であつたと言えるが、性質に注目すれば、そのような対照性よりも類似性の方がはつきり浮かび上がってくる。まず三井についてである。「私」によれば、三井は「疾患をなほす気がなかつたやう」で、「病勢がよほどすすんでからでも、(略)御母堂の眼をぬすんで、病床から抜け出し、巷を歩き、おしるこなど食べて、夜おそく帰宅することがしばしばあつたやうである」。つまり、それは単純な病死ではなく、治そうとすれば治つたかも知れないし、または自ら死期を早めたとも考えられるだろう。一方、三田の場合は、任務完遂のためという点からすれば、もちろん自殺ではない。「自分も死にます、／この戦争のために」。おそらく、任務完遂という内・外面からの要求、雰囲気や思想といったものが絡んでくるだろうが、この決意表明には、死を選択する彼の意志も明確に表れている。また、アツツ島における「玉碎」は、全く歯の立たない戦いで捕虜となることを極力避けたことによる死であつたという意味で、いわゆる自然死からはほど遠く、自殺行為に近いと言つても過言ではないだろう。

三点目として考えられるのは、両者の「病氣」である。三井が肺を病んだことは説明を要さないが、三田の場合はどうか。「からだ工合ひを悪くして入院」し、「私」に対して、「とても、苦しい。激励の言葉を送つてよこして下さい」という意味の葉書を、「再三」出すくらいだったことから推して考えれば、三田の場合もやはり病氣と言つていいだろう。こういった類似点は極めて重要だが、同じく病氣や死をめぐる、二人が対照を為していることも確認しておく必要がある。第一に、病氣に対する処し方に大きな相違がみられる。一方が病氣を治そうとしなかったのに対して、もう一方は入院して病氣を治しているのである。第二に、死に方の相違。三井の病死に対して、三田の場合は軍人としての「玉碎」である。<sup>(8)</sup>

問わなければならないのは、この場合の病死と「玉碎」の間、言い換えれば、それを決定付けたものは何かである

が、その前にもう一つ、三田と戸石について検討しておこう。友人関係にあり、一緒に「私」の家に出入りしていた三田と戸石については、その性格の違いが克明に描かれており、それがまた死に方にそのまま関わっているように思われる。二人はいずれも召集されるが、一人は「玉碎」し、もう一人は生きている。もともと、「私」への便りの中で、戸石も次のように書いてはいる。

（略）淋しく思ひました。あまりに三田さんらしい死に方なので。自分も、いま暫くで、三田さんの親友として恥かしからぬ働きをしてお目にかける事が出来るつもりであります（。）

（傍点引用者）

しかし戸石は、「つもりであります」と結んでいることから分かるように、死の決意を伝えているわけではない。戸石はおそらく三田のような死に方はしないだろう。というのも、二人に関する細かい描写は、比較によつて両者の性格の大きな違いを浮き彫りにしており、我々はそれを通して、両者の異なる死に方の要因をそこに求めることができるように思われるのである。「快活で愛嬌のよい戸石君に較べると、三田君は地味」で、「真面目な人」である。その様子を見てみよう。

その夜は、おもに私と戸石君と二人で話し合つたやうな形になつて、三田君は傍で、微笑んで聞いてゐたが、時々かすかに首肯き、その首肯き方が、私の話のたいへん大事な個所だけを敏感にとらへてゐるやうだつた（略）。人間には、そのやうな二つの型があるやうだ。二人づれで私のところにやつて来ると、ひとりには、もっぱら華やか

に愚問を連発して私にからかはれても恐悦の態で、さうして私の答弁は上の空で聞き流し、ただひたすら一座を氣まづくしないやうに努力して、それから、もうひとりとは、少し暗いところに坐つて黙つて私の言葉に耳を澄ましてゐる。

その頃の文科の学生は、たいいてい頭髮を長くしてゐたものだが、三田君は、はじめから丸坊主であつた。眼鏡をかけてゐたが、鉄縁の眼鏡であつたやうな氣がする。頭が大きく、額が出張つて、眼の光りも強くて、俗にいふ「哲学者のやうな」風貌であつた。(略) 三田君は、酒を飲んでもおとなしかつた。酒の席でも、戸石君が一ばん派手に騒いでゐた。

また、二人きりになると、三田は戸石の「精神の弛緩を指摘し、も少し真剣にやらうぢやないか、と攻める」ので、戸石は三田を「少々苦手であつたらしい」、ともある。このように見てくると、戸石の言う「三田さんらしい死に方」も十分に納得できる。そのような、△三田らしき△が想定しうるとすれば、もう一方に、△戸石らしき△を想定することも可能である。つまり、「玉碎」は三田にこそふさわしく、逆に△戸石らしき△には反するものであつたと考えられよう。言うなれば、ここで「玉碎」は性格の問題に還元されているのである。

さて、それでは、三井が病氣を治そうとせず、そのために病死した―病死を選択した―のはなぜだろうか。明確な答えを出すことは難しいが、次のように考えることはできよう。三井は戸石よりは、どちらかといえば、三田に近い。

〈三井らしき〉というものが考えられるとすれば、それは〈三田らしき〉にある程度重なってくるだろう。三井は、病気を治しても軍隊に取られるのが既定の事実であり、そうなければ死ぬであろう、と考えて、病気を治さずにたった一人の肉親である母親の側で死ぬ覚悟でいたのではないだろうか。三井の、母親の側での異様なまでに静かで「美しい」死は、そのことを物語っていると考えるのである。蛇足になるかも知れないが、三井が戸石のようであつたならば、軍に召集されるにせよ、されないにせよ、死を思い詰めずに、ただ何ともしに生き延びることもあり得たようにも思われる。

すると、何が読めてくるのか。三田は病気を治しても召集されて死に、その一方で三井は、（おそらくそれを避けて）病気を治そうとせず、そのために病死することになる。ここに、要するに、死と隣り合わせの当時の若者のありようが浮かび上がってくる。そして、二人の対照的な死が一緒に語られる必然性もやつと見えてくる。三井の死は、戦争期においては「非国民」と言われかねない死に方である。そのような「非国民」的な死を「比類が無い」、美しい死として、「玉碎」と等価のものとして並べるということ、そして、三田の「玉碎」を性格の問題に還元されるようなものとして扱っていること、それは明らかに「玉碎」の相対化／批評であつたと言えよう。

### 三 「東京だより」

「東京だより」は、「文学報国」の「朗読文学／短編小説特輯」欄に発表された掌編である。この作品に関しては、松本健一と布野栄一両氏による短い言及がある。松本健一は、「太宰はここで、ファシズムの社会相を描きだしている

わけだ。そういった社会相をありのままに眺め、しかもそれへの批判とか、直感的な印象をほとんど表明しない。現実への服従にちかい」と指摘している。<sup>(9)</sup>だが、「東京だより」に見られる、むき出しの〈規格化の要素〉―すなわち、その誇示―から考えれば、松本健一の場合のような否定的な読みの限りでは、もつと厳しい批判があつてしかるべきである。一方、布野栄一は、「太宰治の戦中における良心的抵抗と、一億一心の愛国精神への批判」と評価している。<sup>(10)</sup>この指摘は、ある程度的を射ていると思われるが、具体的にどのような「批判」になつていくかについては検討の余地があり、さらに、「抵抗」とみなして済まされない側面もある。

### 働く少女たち

「東京だより」は、次のように始まる。

東京は、いま、働く少女で一ぱいです。朝夕、工場の行き帰り、少女たちは二列縦隊に並んで産業戦士の歌を合唱しながら東京の街を行進します。ほとんどもう、男の子と同じ服装をしています。でも、下駄の鼻緒が赤くて、その一点にだけ、女の子の匂ひを残してゐます。どの子もみんな、同じ様な顔をしています。年の頃さへ、はつきり見当がつかません。全部をおかみに捧げ切ると、人間は、顔の特徴も年恰好も綺麗に失つてしまふものかも知れません。東京の街を行進してゐる時だけでなく、この女の子たちの作業中あるいは執務中の姿を見ると、なほ一層、ひとりひとりの特徴を失ひ、所謂「個人事情」も何も忘れて、お国のために精出してゐるのが、よくわかるやうな気がします。

戦争末期の日本の人的資源の不足は極に達していた。その補充を目的に、一九四四年一月十九日、十四歳から二十五歳までの未婚女性の軍需工場への動員が決定され、さらに二月十一日には、国民登録制が拡大され、男性十二歳から六十歳、女性十二歳から四十歳まで（無職未婚）の動員が決まった。<sup>(11)</sup>「東京だより」に描かれているのはそのうちの勤労少女たちである。布野栄一はこの少女たちについて、「勤労奉仕団員か、または、女子従業員の愛国女子青年団とかいような名称の集団の組織かで、軍隊式の訓練をさせられていたと考えられよう」と推測している。<sup>(12)</sup>

### 「平凡」な「私」／言説としての逸脱

「東京だより」の冒頭部分が同時代の言説と質的に違うことは明らかだが、といってどう違うかということになると説明は難しい。松本健一の批判的な見方もここに起因するだろう。ここで我々は、語り手であるばかりでなく、作中の一人の人物でもある「私」について、一つのことを確認しておくことが有効であると思われる。

作品をめぐる〈意図〉のレベルで、作品を読者につなげていくのは作者である。言い換えるならば、作品における意図の問題は――場合によっては〈意味〉に関しても言えることだが――語り手である「私」とは無縁なのである。だから、語り手が、作品の出来映えや統制の視線を意識して、語る内容を部分的に隠蔽したり、語ることを渋ったりすることはない。このように考えてきて確かに言えることは、小説家らしい「私」は、戦争期体制について批判することがないという点である。その意味で、戦争期体制に組み込まれた、きわめて「平凡」な人物だと言える。<sup>(13)</sup>太宰治の「禁酒の心」「作家の手帖」もそうだが、ここでは「東京だより」と共に「散華」の場合を確認しておこう。

「散華」の場合、「私」が国家権力や時局に対して何らかの批判的な言葉を発することはなく、むしろ三田の死につ

いて「づば抜けて美しく玉砕」とか、「護国の神となられた」と讀んでいる。それを「私」の「平凡」さと言うならば、そういった「平凡」さを「東京だより」の「私」から確認することは難しいことではない。「私」は、自分の小説集の表紙の絵を書いてみたいと申し出た―だが、実は絵の下手な―徴用工の「絵かきさん」に、自分の小説集がだめになることを覚悟して、「私なんかのつまらぬ小説の表紙の画をかくことに依つて、彼の徴用工としての意気が更にあがるといふならば、こんなに有難い事は無い」と考える。冒頭部分では、少女たちは「ひとりひとりの特徴を失ひ、所謂「個人事情」も何も忘れて、お国のために精出してゐるのが、よくわかるやうな気がします」、と言うなど、一言鋭い批評が飛び出てもおかしくないところで、とぼけたことを言つてすますこともある。このような例は後の引用文から見いだすことができるが、一連の作品に見られるかういった傾向は、そのまま語りの質的な類似性につながっている。各作品における「私」は、みな同一人物のように見え、しかも、みな太宰治を思わせる人物なのである。「私」は決まって「平凡」だが、それらの作品は明らかに逸脱の言説である。「散華」の逸脱については先述したとおりで、ここでは「東京だより」に戻つて考えていこう。

「私」は、工場の事務室で「絵かきさん」を待つてゐる自分を黙殺して仕事を続ける少女たちについても、次のような感想を語る。

みんなもう、見事なくらゐ、平然と私を黙殺してゐます。(略)この黙殺の仕方は、少しも高慢の影は無く、ひとりひとり違つた心の表情も認められず、一樣にうつむいてせつせと事務を執つてゐるだけで、来客の出入にもその静かな雰囲気は何の変化も示さず、ただ算盤の音と帳簿を繰る音が爽やかに聞こえて、たいへん気持ちのいい

眺めなのでした。どの子の顔にも、これといふ異なつた印象は無く、羽根の色の同じ蝶々がひつそり並んで花の枝にとまつてゐるやうな感じ（略）。

ここでも「私」の感想は、せいぜい「たいへん気持ちのいい眺め」といった程度のものである。考えてみれば、「私」が鋭い批評、または逸脱の主体として設定されなかつたのは当然である。太宰治と思しき「私」の語りに逸脱が現れることは、統制という観点から見ても、言説が日の目を見るためには絶対に避けなければならないことだろう。というのも、語り（「私」の感想や批評）は、直截な表現にならざるをえないため、それがそのまま太宰治のものと受け取られるおそれがあるからだ。ところが、このことを逆用すればどうなるだろうか。つまり、「平凡」な「私」という設定を通して、太宰治の「平凡」さを思わせつつ、その「平凡」な語りの中に伝達すべき様々な情報を盛り込んでいくのである。

そして現に、我々はすでに、画一化された働く少女たちのことを、強烈なイメージで示されている。その上で、「でも」と「私」は語る。

でも、ひとり、どういふわけか、忘れられない印象の子がゐたのです。これは、働く少女たちの間では、実に稀な現象です。働く少女たちには、ひとりひとりの特徴なんか少しも無い、と前にも申し上げましたが、その工場の事務所にひとり、どうしても他の少女と全く違ふ感じのひとがゐたのです。顔も別に変つてゐません。（略）服装も変つてゐません。みんなと同じ黒い事務服です。（略）どこも、何も、変つてゐません。それでゐて、その人

は、たとへば黒いあげは蝶の中に緑の蝶がまじつてゐるみたいに、あざやかに他の人と違つて美しいのです。

この「不思議な少女」の「美しさ」はどこからくるのか、いろいろと思いをめぐらし、勝手な結論を下していた「私」は、その「不思議な美しさの原因は、もつと厳肅な、崇高といつていいほどのせつばつまつた現実の中にあつた」とを発見するに至る。「産業戦士の歌を高く合唱しながら」行進していく列の中に、「みなからひとりおくれ、松葉杖をついて歩いて」いる例の少女がいたのである。「私」は「その少女は生まれた時から足が悪い様子」だとし、「美しい筈だ」と言う。しかし、この語りには、その少女がなぜ美しいのかを端的に示すキーワードが空白として残されている。つまり、その少女は「足が悪い」という「せつばつまつた現実」のために「美しい」のだ、というだけでは説明にならない。みんなが「特徴を失ひ、所謂「個人事情」も何も忘れて」いる中で、足が不自由なために同化しようもしようのない、画一化されようもされようのない、そのために「特徴」「個人事情」をとどめているという皮肉な理由によつて、たった一人「美しい」のである。それが本当に「美しい」と言えるものかどうかは別問題であり、語り手である「私」の感性への同調を、我々が押しつけられる必要もない。こうして、その少女の存在は、画一化した少女たちの集団のイメージを強める役割を担うことになるのであり、「東京だより」は、そういった社会相を浮き彫りにし、皮肉を交えて批評したものであつたと言えよう。

## 四 結びに

しかしまた、松本健一が、太宰治は「そういった社会相をありのままに眺め、しかもそれへの批判とか、直感的な印象をほとんど表明しない。現実への服従にちかい」と指摘していることも見逃せない。そのような「批判」の顕在化や「表明」の困難な事態がまず考慮されなければならないが、この指摘が「東京だより」の逸脱性を認めていないことは重要である。というのも、そこに逸脱を認めなければ、全面に出てくるのはむき出しの〈規格化の要素〉—すなわち、「平凡」な語り手「私」の言葉—ということになってしまうからだ。もちろん布野栄一の肯定的な読みもあるが、「愛国の少女像として賛美していると当時は読まれたかも知れないけれど」、と布野栄一自身が述べているように、その可能性は十分考えられよう。その場合、特に、太宰治と思しき「私」の「平凡」さについて述べたことと関連する問題、すなわち、私小説の伝統やそれに関わる読みの制度性が重要な意味を持ったと考えられる。

「散華」についても、おそらくほとんど同じことが言えるだろう。この作品について肯定的な読みがあることは確かである。ただ、先述したような私の読みからすれば、その読みも作品の逸脱性を十分にすくい上げてはいなかったと言えるし、同時に、「問題の多い作品」というような見解が見られたことも無視できない。

このような両極的な評価は、〈矛盾・亀裂Ⅱ逸脱の言説〉の一つの特徴である。語り手の「私」の設定は、太宰治にしてみれば必要な選択だったのだが、それを通して為される、意味に関わる隠蔽／誇示は、両極的な評価を必然的にもたらしてしまうのである。それに、抵抗作品を探し求める傾向の強い戦後の読みより、同時代においての方が、規

アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争 (3)

格化された言説》にとどまった可能性は高いと考えるべきではないだろうか。

それぞれの時代や社会における言説の可能性と限界、両方への正確な認識が必要であるが、ここでは限界を示すことで言説への盲信をうち砕く方向に力点を置いて論じた。

## 注

- (1) 松本健一『太宰治とその時代』(第三文明社、一九八二年)
- (2) 鳥居邦朗『昭和十九年(評伝)』(『解釈と鑑賞』一九九三年六月)
- (3) 北川透『文学の一兵卒―太宰治「散華」について』(『日本文学研究』一九九九年一月)
- (4) 『朝日新聞』(一九四三年六月二日、夕刊)
- (5) 注4に同じ
- (6) 前田夕暮ほか『アツツ島の神々』(『新潮』一九四三年十月)
- (7) 中島健蔵『戦争・弾圧・抵抗』(『文芸』一九五二年六月)
- (8) 両者の死を同列に置くことによって「玉砕」を相対化／批評する形になっているという指摘はもつともだが、私はもう一步踏み込んで考えてみたい。
- (9) 注1に同じ
- (10) 布野栄一『文学報国』に見る良心的抵抗の痕跡——太平洋戦争と文芸家——(『語文』一九九四年三月)
- (11) 家庭総合研究所編『昭和家庭史年表』(河出書房社、一九九〇年)
- (12) 注10に同じ
- (13) 「平凡」という言葉は、太宰治の「佳日」(『改造』一九四四年一月)に拠った。「佳日」には、「私は新聞に発表せられてゐる事をそのとおりに信じ、それ以上の事は知らうとも思はない極めて平凡な国民なのである」とある。

(14) 注10に同じ

※引用の際に、旧漢字は新漢字に改めた。太宰治の作品については『太宰治全集』（筑摩書房、一九八九年～一九九二年）を用いた。  
※本稿は、修士論文（北海道大学・一九九五年）の一部分を書き直したものであるが、論旨の上での変更はなかったことをことわっておく。